

地元で文化を蓄積した豪農

「撮影の回数は年間60作品程度。水戸市と同じだが、撮影日数も併せてみると常総市の方が多し」。

茨城県観光物産課フィルムコミッション推進室は、県内の撮影実績上位の市町村についてこう語る。つまり、常総市が一番というわけだ。

その常総市で、ロケ地の中心に位置しているのが、「だいじん屋敷」と呼ばれてきた市内大生郷の坂野家住宅である。昭和43年(1968)4月、建物のうち主屋と表門(薬医門)が国の重要文化財に指定された。

武家屋敷に多い薬医門があること自体、珍しい造りで、格式の高さがにじむ。加えて主屋西側に「月波楼」という書院がある。この書院は、坂野家が単なる豪農ではなく、深い文化を身につけていたことを伝えている。

坂野家11代当主、坂野耕雨(1802-1862)は名主であり、かつ漢詩や儒学、尊王思想を学んだ知識人だった。交友関係も広く、多く

の文人・墨客が坂野家を訪れた。伝えられている多くの美術品や古文書の存在がそれを物語っている。

耕雨は、古澤村(現 下妻市)の古澤久右衛門治居の次男として生まれた。坂野家10代、祐慶の養子となり、坂野家11代当主となる。向学心旺盛で、江戸に出て、漢詩人で有名な梁川星巖の門をたいた。

当時、星巖は神田に「玉池吟社」という私塾を開き、詩人として活躍していた。その一方、水戸藩の藤田東湖や松代藩の佐久間象山らとも交わり、幕末志士たちとの親交を深めていた。

耕雨は、江戸遊学時代、星巖を通してこれら時代の志士たちとも交友したようだ。それを示す物として坂野家から常総市に寄贈された所蔵品の中に藤田東湖が耕雨宛てに出した書状が残っている。内容は「お礼として鯉節一束を寸志として贈る」というもの。東湖と耕雨の関係が垣間見える。

坂野耕雨

Sakano Kō

江戸から戻った耕雨は、坂野家の発展に尽くすとともに、大生郷の自宅に「月波楼」を造り、自ら漢詩の創作に励んだ。

併せて江戸や近郷の文人・墨客を招き、親交を温めている。「月波楼」は12代行齋に引き継がれ、坂野家の文化的拠点としての役割を担った。

交友のあった文人の中には、農村復興の指導者、二宮尊徳もいる。3,000町歩に及ぶ「飯沼新田」の開発後、水はけが悪くなった水田は荒廃した。それを改良するために尽力した。この書院で、耕雨は二宮尊徳とどんな議論を交わしたのであろうか。

坂野家住宅は平成10年(1998)、歴史的な転換点を迎えた。「建物は譲り受け、土地は購入した」(常総市)。市所有となった坂野家住宅は、以後、「水海道風土博物館」として一般公開されている。

建物譲渡に併せ、主に耕雨の時代に収集されたとみられる370~380点もの収蔵品が市へ寄贈された。中身は美術品、古文書、調度品など。藤田東湖の耕雨宛て書状もこれらの

収蔵品の一つで、他に江戸期の画家、佐竹永海筆「賢人図」などもある。

坂野家は、耕雨を筆頭に地域文化発展に貢献しただけでなく、その子孫もまた先祖が残した財産を地域に還元した。

主な参考文献

「水海道風土博物館坂野家住宅」(常総市教育委員会生涯学習課編集)、「水海道市史(上巻)」等



国指定重要文化財となっている表門。奥に主屋が見える
=常総市大生郷町(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「文化」のヒント